

# 大学出版

The Association of  
Japanese University Presses

No.130

2022.6

春

【特集】 学術出版を語る ― 連続講演会

― コロナ禍でも立ち止まらないために

― 学術出版の次を妄想する 江草貞治 2

学術出版の縁から

― 変化の時代を生き抜くために 喜入冬子 7

出版の未来、出版社の未来

― 多様な読者の求めるもの 矢部敬一 12

学術出版の「バックヤード」 黒田拓也 17

【連載】 何年経っても忘れられない、編集者の一冊 《5》

中内克昌訳 『フラメンカ物語』 奥野有希 表2

大学出版部ニュース 22



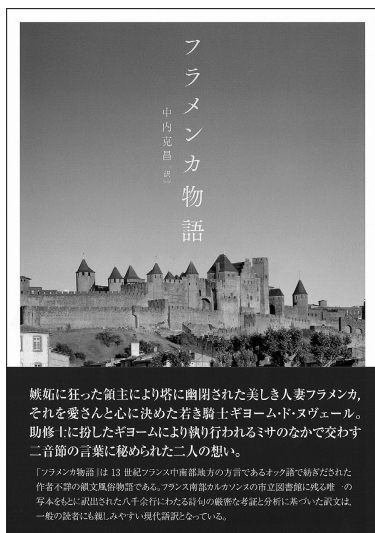
一般社団法人  
大学出版部協会

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

中内克昌 記

## 『フラメンカ物語』

奥野有希（九州大学出版会）



カバーには原著の唯一の写本が残る地・カルカソンの写真を掲げた。帯は最初は付けなかったが、中内先生のご逝去後、ご遺族のご希望を受け新たに作り巻くこととなった。本書のあらすじを記した帯をともに作る中で、ご遺族の寂しさが少しでもまぎれたのであれば本望である。装幀：松野尾浩久印刷：城島印刷株式会社〔九州大学出版会・2011年／A5判上製・232頁・定価4180円〕

「フラメンカ物語」は十三世紀フランス中南部地方の方言であるオック語で書かれた作者不詳の韻文風俗物語であり、現存する中世オック語作品群のなかでも、資料的価値・文学的価値ともに文句なしの一級品と言えよう。本書はフランス南部カルカソンの市立図書館に残る唯一の写本をもとに訳出されたものであり、かつて企業や在日フランス大使館で翻訳の仕事をしていった訳者による親しみやすい訳文で展開されている。

この物語は塔に幽閉された美しき人妻と若き騎士のラブロマンスであるが、実は未完となっている。世界にただ一冊の写本が毀損により中断してしまっているため、お話は騎士同士の馬上槍試合のシーンで唐突に終わってしまう。初めて原稿に目を通した私はその終わり方がっかりし、訳者である中内先生との会話のなかで「このあとはこうなるのではないか」といった「妄想」をお話した。いつも穏やかな先生は「さあ、どうですかねえ」と笑っておられたのを覚えている。

校正の途中で先生は一時入院された。心臓にご病気が見つかり、手術なさったのだという。退院後に打ち合わせでお会いした際はお元気な様子であったが、シャツを開けて見せてくださった大きな手術痕は痛々しいものだった。本書は二〇一一年の秋に刊行されたが、しばらくして先生の奥様からご連絡を受ける。ご病気が再発し先生がお亡くなりになったことをうかがい、教会で行われた葬儀ミサに参列した。刊行後、何度かやりとりをしたきりの私にとっては突然の幕切れであった。

今この本を開いても、最後のページのあとに私は「物語のつづき」を探してしまう。未完であるということは、読む人間が自由にその先を想像できるということでもある。いつか「フラメンカ物語」の完本が見つかりその本当の結末がみられる日がくるのかもしれないが、人生のようにまだ終わりがわからないからこそ、この本は魅力的なのかもしれないと思っている。

## 特集

# 学術出版を語る——連続講演会

大学出版部協会では、連続オンライン講演会「学術出版を語る」を、昨年六月から不定期で開催してきました（共催・日本出版学会）。本特集では、全五回のうち四回分の講演を、新たに纏め直し掲載いたします。出版の構造転換が叫ばれるなか、コロナ禍も加わり先行不透明となる現在、出版社を率いるリーダーが展望を見通します。

## コロナ禍でも立ち止まらないために——学術出版の次を妄想する

江草貞治 (有斐閣 代表取締役社長)

### はじめに

学術出版周辺のこれからを考える前に、まず私たちの置かれている環境を見回してみると、ICTの進展や著作権法の改正に加え、高等教育手法の変革期にあり、誰も経験したことのない変化の途上にあります。誰も今後のことに答えを持っていくわけではなく、試行錯誤しながら環境変化に適応していくほかありませんが、場合によっては今の事業形態を維持しながら生きながらえることも可能かもしれません。しかし一般の読者や研究者のニーズは多様化しており、現状維持だけでは縮む一方で学術出版はよりニッチな存在になってしまうことも考えられます。引き続き読者や執筆者からの期待に応え、学術出版の隘路や袋小路を突破していくために、私がぼんやり妄想していることを叩き台として共有したいと思います。

本考察の結論としては、出版事業を従来のイメージ(例えば著者に書いていただき編集して読者に売るという単線的な「ものづくり」)ではなく、「プラットフォーム思考」で見直ししてみると、出版社の役割とその価値に対する対価といった点を再考することができ、専門書出版の隘路や袋小路を突破できるのではないかというものです。

### 有斐閣のビジネスモデル

#### 創業時の事業

明治一〇年に「江草斧太郎」が、大学の前身となる専門学校ができてきたあつた神保町に自身の店を開いたのがスタートです。

古書の売り買いと同時に親身に学生の面倒をみていたこともあり、立身出世をした卒業生が執筆者となることで古書店から出版社へと移行することになりました。学生の借



金の肩代わりや交渉、飲食の補助などパトロンの役割も担い、学生の懐に入り込むことで信頼を勝ち得たようです。とはいえ江草斧太郎への追悼の辞には当時の学生が「江草の親父はしたたかな商人でもある」と書いているので、学生との付き合いは事業に活かしていたのでしょう。

学生と本の売買の関係以上の関係性を築いたことで、「有斐閣」は学生にとって書店以上の存在になっていたはずです。

### 現代の事業

テキスト、専門書（学術書、実務書）、一般教養書の三領域のバランスが大事な要素と考えています。どれかが突出しても社会科学書出版としての裾野の広がりや欠き、「学問の伴走者」としての有斐閣の使命を全うすることができないと考えています。

まず「テキスト」は教育者が講義を行う上でのツールとして販売するために、改訂更新の頻度、講義での使い易さを重視しています。

「専門書」はプロフェッショナル（研究者や実務家）への販売に向け正確性や専門性を重視することにより、読者に加え執筆者の信頼を得て、学界の研究の深化に繋がることを期待しています。

「一般教養書」のような書籍は、読者の資格試験や学びへの関心から自発的に購入されることを想定しています。このそれぞれの領域に対応した読者は独立しているわけ

ではなく、「テキスト」で良い講義を受けた学生が研究者や法曹実務家の道に進むなど他の領域に遷移していきます。また研究成果公表の場である「専門書」は学界の発展に寄与し、さらに「一般教養書」に生まれ変わって新しい読者をその領域に導きます。つまり出版物を仲立ちにして、三つの領域に三つの読者がそれぞれに影響を与えながらお互いの場を大きくし、更なる成果を産み出す手伝いをするのが有斐閣における学術出版事業と考えています。

### 問題意識と仮説

コンテンツ利用のデジタル化、著作権者の権利制限といった外部環境の変化の流れは元に戻ることはないと考えています。さらに高等教育機関では、研究者の減少や多忙化、資料購入予算の減少、知識教授型から考え方や問題発見等の実践的講義になるなどの大きな変化が訪れています。私たちは読者に購入してもらっただけでなく、様々な利用に対するライセンス料や補償金の受け取りを含めた複合的な事業モデルを積極的に試してみるタイミングに来ているのではないのでしょうか。

### デジタルと出版の関係

本を読むというそれ自体が目的の「読書」に加えて、本の中身を積極的に利用するための「読書」がICTによって加速しました。

電子図書館は、コロナ禍に対応するためというやむを得

ない側面はあるものの、大学図書館での導入は二〇二〇年に大幅に伸長しました。今後は、講義自体が電子資料活用スタイルに移行するかどうか注目されます。

教育、研究、調査のDXも加速しています。研究者によって濃淡はありますが、たくさんの関連書籍をゼミで駆使するためにサブスクリプションを活用したり、古典名著の一部分を多読するなどの教育方法を望む声もあります。

また法律の研究調査では、民事裁判の判決文が全文デジタルデータで公開されることが検討されていますが、これまでは考えられなかったビッグデータを使った研究手法が法学でも起こり得ます。

弁護士事務所もDX促進が必須となり、そこで導入されているサービスは単なる書籍検索と閲覧だけでなく、業務のデジタルサポートにAIを使った法律文書作成補助や、管理保存です。起案中の文書の共同編集や進捗管理等業務に即したシステムなどが組み込まれているのです。

このようにデジタル化によって著作物の活用が広がっていると言えますが、デジタル化によるそうした多様な利用は、著作権者の有する様々な権利から許諾を得る必要があると同時に、実務的には出版社がデジタル化を進めていなければ使えない状況にあります。権利制限はデジタルペーソでの利活用が進まない文字コンテンツについて、一足飛びに利用促進を図ろうというものです。制限を受けて諦めるのではなく、出版の収益確保について多様な手法を取り

得る機会と考えることもできるでしょう。

しかし権利制限については多くの問題を含んでおり、制限をしてもその利用は容易ではありません。特に著作物を様々な使い方で利用しようとしても、デジタル化や権利処理コストが掛かるなど諸条件が整わないケースがあり、多様な使い方をしたい読者と出版社の対応にズレが生じるこゝとが少なくなく、「有斐閣の存在が学術情報流通の隘路になつてはいないだろうか」と考えさせられることもしばしばあります。

出版社として出版して終わりではなく、ICTを活用してどのように利用されているかを視野に入れ、著作物の利用機会の最大化を考える必要があります。

### プラットフォームビジネスとしての学術出版

有斐閣における学術出版について創業から現在に至るまでの仕掛けを説明しましたが、原料から製品を作るようなシンプルな製造モデルではなく、ひと続きのサービスの上で読者と著者双方に違う価値を提供するモデルと見ることができれば、すなわち今日的なプラットフォームと（かなり強引にはありますが）同じ役割を担っていると考えられるのではないのでしょうか。となればプラットフォームと呼ばれる会社がどのように新しい価値を創造しているのかを参考にできれば、出版事業もバージョンアップできるのではないか、という発想に繋がります。

プラットフォーム（以下PF）とは

PFは共通の目的や同じ資源を共有するためのシステムを利用者に提供し、システム上で複数の参加者グループにより個別サービスの開発と提供が行われます。典型例としてFacebook（以下Fb）を見てみます。Fbは登録利用者に対して、学校の同窓生であることや同じ趣味を持つこと等をキーにして利用者同士を結びつける仕組みを無料で用意し、日々の投稿を相互に投稿・閲覧するコミュニケーションの場を無料で提供しています。

一方で登録利用者は年齢や学歴等でセグメントされ、日々の投稿から行動パターンが蓄積されていきます。このFbの利用データを元に利用者属性に即した効果的な広告をした企業はFbに利用料を払い、用意されたアルゴリズムで効果的な広告を表示します。

さらにニュースやゲームアプリ等のコンテンツも提供されて、利用者はまたFb上でそのサービスについて同好の士と会話をしながら楽しむことができます。

■岩波科学ライブラリー 307

# 学術出版の来た道

有田正規

特殊な評価・価値体系を形成してきた学術出版が抱える構造的な問題を、歴史的な視点から解き明かす。

B6判 定価1650円

つまり複数の場（知人と繋がる人の場、ゲームで遊ぶ人の場、商品を広告する場……）それぞれに独立した価値を提供しながらさらに場をつなぎ合わせ、交流が促進されることますます参加者が増えるという仕組みが、新しい価値を産み出すようになっていきます。

有斐閣をPFとしてみる

前述したように、創業当時の古書店時代、本の売買と同時に苦学生に対する金銭的・精神的なサポートをしていたことで「有斐閣のおやじは面倒見が良いし付き合ってやろう。困ったら本を売り、学問を修めたら本を書いてやろう」という場が形成され、学生が集まれば商材としての本も集まるという好循環ができました。

出版社へ移行した後の出版事業をみると、「研究を出版したい」学術コミュニティに対して出版&販売のサービスを提供する事業を行いつつ、「体系的な知識や最新の知見を得たい」ユーザに対して、読みやすく（校正等の編集行為）、買いやすい（全国流通、継続販売）ものにして提供するという

# 歴史とは何か 新版

E・H・カー／近藤和彦訳

四六判 定価2640円

歴史学の最良の入門書にして二〇世紀の古典的著作を全面新訳。達意の訳文と解説によって、カーの肉声が鮮やかによみがえる。



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

<http://www.iwanami.co.jp/>

う二つの価値を生んでいたと考えられます。研究が厚みを増すことで読者が増え、さらに研究への参加者も増えるといった相互に循環のある事業となりました。

つまり、弊社の出版ビジネスは、書き手と読み手それぞれに異なるサービスを提供している、ある種のPFとみることができるとは思いません。

有斐閣がPFを参考にするとすれば、例えば執筆動機を持つ執筆者に対して更に優れた編集機能や校正技術と販売チャネルを提供し、快適で更なる研究に役立つ出版経験をしてみよう。読者には、研究成果を様々な形で利用してみよう（活用してみよう）ことを、紙やデジタルということに拘らずに提案ができるのではないかと思います。

ここ数年の出版界に対しては、権利制限という法改正によってコンテンツの利用促進が強制されていますが、その権利制限が必要になる背景には新しいコンテンツ利用のニーズが埋もれている可能性があります。権利制限を契機として新たなサービスを提供することができれば読者や執筆者のみならず出版社にも恩恵があり、それは取りも直さずPFとして振る舞うことで実現できるのではないのでしょうか。

### 「学術出版の次」を妄想する

出版がそもそも執筆者と読者の間に立ったPFだとすると、双方に対して価値を最大化することを考えていく必要

がありそうです。執筆に際し高度な編集機能や校正技術、絶版が無く探しやすい販売手法などで研究公表方法をバージョンアップすること。読者の好奇心を加速する買いやすさ読みやすさを追求し、これらを出版社の枠を超えて提供することはとても魅力的に思えます。また紙での出版だけでは読者の多様な期待に応えることができない場面が今後更に増えることを、覚悟しておく必要があります。

現状の出版に最適化された業務体制は、利活用の場面ばかりではなく、実は制作面でもICTの恩恵を受けられていません。出版社にとつての「DX」は、最後の成果物も含んでデジタルで提供するだけでなく、より上流の工程に対してデジタル化⇨合理化し、書誌情報等を社外の組織と考えます。

これまで妄想を披露してきましたが、利用する読者にとつても著者や流通・小売りにとつても、出版社が隘路になって恩恵を受けられないということがないように、社外の第三者のアイデアと協力を得ながら整えていくことが肝要ではないでしょうか。

## 学術出版の縁から——変化の時代を生き抜くために

喜入冬子（筑摩書房 代表取締役社長）

そもそも筑摩書房は学術出版の会社なのだろうか。

ある記事によると、学術出版とは、①「学術研究」のための出版で娯楽や実用ではなく、②自費出版でも商業出版でもない、とされています（<https://www.genosha-book.com/column/26/>）。筑摩書房は「学術研究」的な内容の出版はやっていますが、それは学術研究のためというより学術研究の成果を一般に広めたいという意味合いが強く、微妙です。また、商業出版を行っているつもりですが、この記事で言うところの商業出版は「一冊一〇〇〇円前後、五〇〇〇〜一〇〇〇〇部、数か月で完売をめざす」とされており、こちらも微妙です。よっていまの筑摩書房の位置は学術出版の「フチ、ヘリ」かなと思いい、こうした演題になった次第です。

### 筑摩書房はどういう版元なのか

筑摩書房はそもそも自覚としては文芸出版社でした。創

業者は、創業の相談をした先達から「何をやりたいのか？」と聞かれ「文芸物を」と答えています。ただ、その「文芸物」の範囲は広く、文芸評論から、哲学・思想など人文書にも及び、読者は広く一般でした。

筑摩書房の歴史は三期に分かれます（参考文献・筑摩選書『筑摩書房の三十年』筑摩書房それからの四十年）。

まず、創業から終戦まで。創業は一九四〇年で、長野県出身の古田晁と同郷の盟友・臼井吉見というふたりの文学青年が、同人誌を作る延長線上のような感じで始めました。そこに、やはり同郷の先輩・唐木順三、さらに中村光夫が参加。彼らの奮闘で、戦争に向かう社会のなか、がむしゃらに「いい本を出す」ために出版社をやっていたのがこの時代であるといえると思います。『筑摩書房の三十年』に、古田と臼井が松本高校時代に交わした会話が載っています。「岩波書店のなした仕事というものは、ひとつの大学を

ぶつ建つぐらいの寄与を、日本文化にしているんじゃないか。ひとつ、どうだい」「それはいいじゃないか」

古き良き青春映画の一コマのよう。つまり「日本文化に寄与したい」という志で始めたわけです。白井吉見が起草した創業の挨拶にも、それはストレートに表れています。

「まことに今こそ真理と美が、その力を発揮しなければならぬ時であると思います。」「正しい知識と情熱の普及が今日ほど急を要する時はあるまいと考えます。」

戦争が拡大し戦況が悪化するなか、紙の調達に苦労したり、白井をはじめ社員が召集されたり、会社が何度も焼け出されたりして、ついに古田が実家に戻り長野で活動をつづけようとした矢先、四五年八月、終戦になりました。

第二期は終戦から倒産まで。終戦翌年の四六年一月に出した雑誌「展望」は創刊五万部が完売しましたがその好調は長くは続かず、太宰治『人間失格』はじめ、たまに出るヒットで何とか食いつなぐ状態だったところ、五三年「現代日本文学全集」で起死回生。五六巻の予定を九九巻にして総発行部数一三〇〇万部となる大ヒットでした。以後、全集企画が増え会社の規模も拡大。「全集の筑摩」と言われるようになりましたが、全集は刊行が遅延しがちでキャッシュが回らず、結局、七八年に会社更生法を申請します。この倒産の背景に何があったのか。これは筑摩書房と学術出版というテーマにかかわるので少し考えてみます。

「硬派の良心的出版を続けてきたが、文庫やコミックな

ど時流に乗った本を出すことに抵抗したために追い詰められた」という同情的な声が多かった反面(たしかに森村誠二「人間の証明」の映画公開が七六年、カドカワ文化が一世を風靡していました)、白井吉見による「筑摩書房の倒産は、その原因理由はことごとく内部にあると信じます。醜態のきわみです」といった厳しい声もあったようです。いまから思えば、結局、「いい本を出す出版社」という看板によりかかって胡坐をかき、時代の変化に対応できず自滅した、ということではないかと思えます。

『筑摩書房の三十年』に、社会学者の加藤秀俊さんの「中間文化論」(中央公論「五七年三月号掲載」)の話が出てきます。「戦後文化の第一段階は高級文化中心で、第二段階は大衆文化中心になり、第三段階は中間文化中心」と加藤は言っている、と。そしてこう続きます。「『展望』は、この第一段階の、見事な産物であった。」「『展望』は五年に休刊。大衆文化・中間文化中心の時代にはハイブローすぎたのでしよう。」

この加藤さんの「中間文化」について、社会学者の竹内洋さんは、戦後中学の義務化と高校の大衆化によって、かつて「インテリの教養、大衆の修養」であったものが「インテリの教養と大衆のミニ教養」になった。このミニ教養主義、つまりモダンで知的な大衆文化が輪郭を持ち一定の厚みに達したとき、それが加藤によって「中間文化」と名付けられた、と言っています(『大衆の幻像』中央公論新社、



そして、この中間文化の時代は高度経済成長長期に重なり、まず（ベトナム戦争勃発が五五年）。サラリーマンが急増し、団地や文化住宅が建ち、応接間ができ、そこに置かれたキャビネットには百科事典と全集が置かれている。ミニ教養主義ですから教養にリスペクトや憧れもある。筑摩書房の起死回生をもたらした「現代日本文学全集」が出たのは五三年でその前夜ですが、完結が五九年なので、この高度経済成長の恩恵は十分に受けたのではないかと思います。でもキャビネットはそんなに大きくなかった。というか、休刊した「展望」と「現代日本文学全集」の読者層の違いを、当時の筑摩書房が意識していたようには思えません。ましてや高度成長がひと段落し「一億総中流」時代の教養がどうなるのかについても。あいかかわらずハイブローな「いい本」を目指していて「商業出版」としてはうまくいかず、結果として倒産してしまったということではないか。

いずれにしても、周囲のさまざまな支援を受けて、筑摩

## 知泉書館

### 文化哲学入門

(知泉学術叢書 20)

コナースマン／下田和宣訳  
「文化の危機」へのジメメル  
とカッシーラーの応答を現代  
に展開 新書/226p/2700円

### 現代の哲学的人間学

間主観性の人間学とは何か

金子晴勇 一世紀に渡り進化した  
生命科学や新たに躍進する  
諸科学の知見を活用した概  
説書 新書/392p/5000円

### 中世哲学講義

第二巻 昭和45年—49年度

山田晶著, 水田英実編 京都  
大学での18年に及ぶ中世哲学  
講義を取録した貴重な記録。  
全五巻 A5/438p/4000円

### 一なるキリスト・ 一なる教会

ピザツと十字軍の狭間の  
アルメニア教会神学

浜田華練 12世紀アルメニア  
教会・文学史の代表的人物シュ  
ノルハリの功績と東地中海史  
に迫る 菊/292p/4300円

### エックハルトとその時代

中山善樹 思想の特徴や全体  
像を紹介し、ラテン語著作を  
通して思索の深さと独自性に  
触れる 菊/222p/4000円

### 禅とキリスト教

クラウス・リーゼンフーバー提唱集  
リーゼンフーバー 坐禅を通  
し超越の思索を探究する。語  
られた数々の言葉は魂の貴重  
な記録 四六/320p/2500円

東京都文京区本郷 1-13-2 (税別)  
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166  
<http://www.chisen.co.jp>

書房は再建されました。ここから第三期です。第三期は皆さんある程度ご存じでしょうから、詳しくは申しませんが、再建の大きな柱は二つあって、ひとつは、営業改革。営業がデータを入手し分析し、部数や定価について編集に物申せるようにしたこと。もうひとつは、企画内容の改革。ペーパーバック中心(文庫、新書等)の出版物に移行したこと。漢字の「筑摩」から、ひらがなの「ちくま」に変わった、というのが象徴的かもしれません。

八〇年代、時代はバブルに向かっていました。フランス思想がけん引したポストモダン、ニューアカデミズム・ブームも起きました。浅田彰、中沢新一といったカッコイイ若手思想家の本がバブルの浮かれた気分とシンクロするようヒットしました。しかし、これは中間文化の最後のあだ花のようなものだったと思います。ちなみに社会学者の村上泰亮さんは八〇年代を「エリートではないが大衆でもない」「新中間大衆」の時代」としており(「新中間大衆政治の時代」中央公論 八〇年二月号)、それは、竹内洋さんによ



れば「加藤がかつて着目した中間文化のひろがり」と中間文化大衆の結晶化」であるとされています。

八〇年代はパソコンもインターネットもなく、本は情報源として一定の価値を持っていましたし、ミニではあっても教養主義が生きていて教養にリスペクトはあり、小難しい思想系の本もカッコイイものになり得ました。けれどもバブルがはじけWindows95が出てパソコンが普及し、二〇〇〇年代にインターネットが爆発的に普及すると、情報源としての本の価値は下がりました。すべてがフラットな時代、思想としてではなく現実にはポストモダンの世界になってみると、インターネットの価値は急降下。「本を読まなければいけない」圧力はすっかり勢いを失ったように感じます。倒産の反省から、いわばカジュアルな教養主義路線で立ち直ってきた筑摩書房は、ここにきてまた、大きな時代の変化に翻弄されている、といったところでしょうか。

### 時代の変化にどう対応するのか

ご存じのように、一九九六年をピークにずっとシュリンクしてきた出版市場が一昨年、昨年と改善しました。その要因はおもに電子コミックです。コミックスを持つ大手出版社はデジタルソフトを加速させていくでしょう。ではコミックスを持たない出版社であるわれわれは？

市場シュリンクの主な理由は言うまでもなくネットの普及です。ネットへのアクセスはまさに「生活必需」なもの

となり、誰もが無料で情報を手にすることができずから、でもネット情報は不確かで細切れなものが多い。対して、本の情報というのは、一定の分量があり、それを読者に伝えるために「編集」してパッケージ化してある。なにより、著者と出版社がきちんと名前を出し、その品質保証をしています。じつさいのところ、目の前の困っていることをちよちよつと解決、というには、ネット情報で十分ですが、体系的に何かについて知ろうと思ったら、やっぱり本に頼るしかありません。それは紙の本でも電子書籍でも同じです。

私は出版社の人間ですから、もちろん、本はできれば紙で、リアル書店で買って読んでほしい。本屋さんはわれわれの生命線ですから。でも、紙と電子はそれぞれメリットデメリットがあり、それは読者が選ぶことです。出版社が作って売っているのは、本質的には本という物ではなくコンテンツという情報ではないかと考えます。

ネットは功罪ありますが、なくなることはありませんから、使うしかありません。読者に直接、情報を届け、私たちの持つコンテンツの価値を理解してもらい、お金を払ってもらおう。さらにはネットからリアルに誘導する、潜在読者を本屋に向かわせることをも試みたいと考えています。

電子書籍でも紙でも、ネット書店での本の購入は、自分がそもそも買いたい本を買う、つまり目的買いです。それでは貧しい、と思うのです。ネットでの情報集めは、フィ

ルターバブルになりがちです。本屋さんに行つて、涉猟する、そうして、思いがけないものに出会う、それが世界を広げるわけですから。確かに効率が悪いでしょうが、そのことの価値を知ってほしいと思つています。で、そのうえで、ほしいなと思つた本を、電子で買おうが紙の本で買おうが、それはどちらでもいいのではないのでしょうか。

### 筑摩書房の社会的役割はなににか

創業八一年目を迎えた筑摩書房ですが、「日本文化のためにいっちょやろう」という思いは、今もそう変わりはなく、やるべきことは、結局やっぱり教養主義だろう、と思つていきます。

筑摩書房の初期の教養主義はハイブローな、学術的なものでした。それが中間層向けのカジュアルな教養主義になり、九〇年代のバブル崩壊と中間層の激減により、「教養主義」そのものも消滅したかのように見えます。「知らない」ことを恥じなくなり、二〇〇〇年代には、歴史修正主義の

登場などで、「真実」の追求そのものにすら疑惑の目が向けられた。真実はどうせ不明、だから好みの説でいい、両論併記でいい、ということ、ポスト・トゥルースの時代ともいわれます。そういう風潮が、コロナ禍関連のデマなどにも表れているように感じます。

しかし、それでは困る、と考える人はたくさんいます。いま何が起こり、自分はどうな世界にいるのか。それを考え追及する人たちの知識や知恵を、手を変え品を変え本という情報にして流通させていくこと。立派な論考でなくとも、エッセイでもフィクションでもノンフィクションでも、実用書でも写真集でも、それは可能です。それは、いまの時代の教養主義のありようのひとつではないかと思えます。「教養は、人の心を知る心だ」と言った人がいます。人は、いま隣にいる人すら理解できない。でもわかりたい、それが世界の理解へとつながります。私としては、そういう意味での教養を育てていくための出版を続けることが筑摩書房の役割だと思つていきます。

## 居場所なき革命

フランス1968年とドゴール主義

吉田 徹 社会と国家が正面衝突した、あの年、未曾有かつ評価の定まらぬ革命の姿を、旧政治による反革命を友鏡に描く。¥4180

## 生殖技術と親になること

不妊治療と出生前検査がもたらす葛藤

植木あづみ 生殖技術を望む人の気持ち、その背景にある価値観、法律や社会との関わりなど生殖技術の全体像を描く。¥3960

## 離婚の文化人類学

現代日本における〈親密な〉別れ方アレクシー アメリカの気鋭の人類学者が21世紀初頭の日本でフィールドワーク。生き生きとした民族誌的成果。濱野 健訳 ¥5280

## 恥のきずな

新しい文献学のために

ギンズブルグ 歴史的記憶が薄っぺらになるネット社会で歴史の厚みを取り戻す。変革の知が宿る論考集。上村忠男編訳 ¥6380

## アフリカ文学講義

植民地文学から世界・文学へ

マバンク 西欧の暗黒大陸像からルワンダ虐殺以後まで、ブラック・アフリカ文学の全貌。斬新な文学史。中村・福島訳 ¥4950

## 否定された施設

精神科病棟開放化レポート

バザーリア編 病棟に携わる者たちの証言により明らかにする1968年イタリア、閉鎖病棟開放のドキュメント。梶原 徹訳 ¥8250

## 革命論

アーレント 新しい始まりはいいかにして生じるか。『活動的生』に続く哲学的名著『革命について』独語版新訳。森 一郎訳 ¥7150

東京文京本郷  
2丁目20-7  
tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)  
www.msiz.co.jp

# 出版の未来、出版社の未来——多様な読者の求めるもの

矢部敬一 (創元社 代表取締役社長)

書籍というものは近年に至るまで、情報を伝える「媒体」として唯一といってよいほど完成度の高いものでした。しかし近年の「媒体」の多様化と流通の大変革により、書籍の存在そのものが、変化の激流の中にあります。以下に、目の前の状況と明治二〇年頃に起きた和本から洋本への移行期を比較することにより、出版業というものの将来像、中小出版社の行く末を考えてみようと思います。

## 江戸期以降の歴史

出版の未来を考える上で、過去の歴史を参考にすることが理解を助けてくれます。日本で商業出版として書籍が流通を始めたのは、仏教書の需要からまず京都より始まりました。大坂に京都の出版職人がやってきて出版活動を開始するのが一七世紀の終わり頃です。その後しばらくして、江戸、京都、大坂では出版社の組合として本屋仲間が組織

され、多くの書誌(書肆)・書林が和本による活発な出版活動を行っていきます。しかし、明治になって大きな変化が起きます。それが、印刷技術の大変化です。

日本では明治一〇年頃まで千年近くもずっと木版印刷が主流でしたが、活版印刷の技術が本格的に普及する明治二〇年頃以降は、洋本が主流となります。その結果、刊行している出版社の顔ぶれが大きく変わっていきました。江戸時代の出版社で明治二〇年の壁を乗り越えたところは非常に少なかったのです(この話は神田誠心堂書店の橋口氏の書籍で教えられました)。なぜ少数の出版社しか残らなかったのか。まず、業態そのものが大きく変わりました。和本の時代の版元は、書誌・書林という名称で出版(企画、編集)、新刊本書店、古書店、卸、貸本、選書、相版(現代のコピー)、本の修繕など本に関する事業の多くを一つの店が担当していました。お客さんも一般の町人読者だけではなく、卸間、

書店間のやりとりもあり、販売も店頭だけではなく、外商や目録販売、郵便での販売など多岐にわたっています。それが明治二〇年代以降、活版印刷、洋本が主流になると、大量印刷、大量流通、大量販売が行われるようになり、それぞれが専門化して、新刊書店、取次、出版社となります。そして、活版印刷、洋本の需要はますます増大し、昭和一〇年代前半に至るまで小さな波はありましたが、基本的に出版業界は発展するものの、戦争中は企業統合により、出版社や取次は強制的に合併させられ、厳しい時代を過ごしました。それでも、第二次大戦後は、出版社、取次、書店などの数も増加して活況を呈していました。各地に八つの取次が開設され、今に続くトーハン、日販、大阪屋（楽天ブックズネットワーク）もその中にありました。取次という存在がその後巨大になって行くのは皆様ご存じの通りです。書店も大規模化し、大阪では一九六九年に紀伊國屋書店梅田店、旭屋書店本店が万博に合わせてオープンし、小学生だった私は、その書店に押しかけた人たちのすさまじい熱気を今でも鮮明に覚えています。

万博以後も、オイルショックや一般的な不況の波も何度かありましたが、出版業界は基本的には不況と無縁であると言われて、概ね一九九六年まで成長を続けます。

## 現在の立ち位置

しかし二〇世紀の終わり、出版業界が全盛を極めたまま

にその時、ITの本格化が始まります。一九九五年にWindows95の発表、二〇〇〇年にアマゾン・ジャパンの日本語サイトがオープン、翌年にグーグルの日本法人が活動を開始します。この頃から社会全体の状況が大きく変わり始めます。デジタル・ネットワークが本格的に社会で認知されはじめ、インフラとなっていきます。二一世紀初頭から二〇年あまり経過した現在、我々の業界は明治以来、再び本質的な変化に遭遇していると言えるのではないのでしょうか。しかも、その変化の幅は今回の方がかなり大きいです。

それでは、デジタル・ネットワークの時代に我々の業界で一番変わったことは何でしょうか。情報媒体の多様化と、流通大変革による旧来型の大量販売の終息です。また、出版社と読者という関係を見ると、このデジタル・ネットワークの進化によって出版社と読者との距離が相当近くなったと思います。出版社側から言えば、取次、書店の向こう側にいる読者像は見えにくい存在でしたが、今は読者が直接目の前にいます。

## 出版社としての変化の方向

次に、今後の出版業界全体についてですが、出版社の規模や事業の内容によって、個々の出版社の進んでいく方向はそれぞれに大きく変わってきています。同じ地平で議論することがだんだんと難しくなっていると思うことが

あります。それぞれの出版社が、何を自分たちの事業としてやっていくのか、それは選択の幅が広くなって、いろいろな組み合わせができるという反面、それに対応するための組織変革や事業の見直しを根本的に図らざるを得ません。当社は、ちょうど木版印刷から活版印刷へ主流が変わった節目の明治二〇年代に事業をスタートし、今また大きな節目にさしかかり、会社設立以来の転換点に立っていると認識しています。既に申し上げたとおり、大量印刷、大量販売の出版業界になる前の江戸時代には、書肆・書林は出版、卸、新刊書店、古書店、貸本屋、本の輸入（唐本）、目録販売、委託販売、本の選書、相版などいろいろなことをやっていました。そこから分業化してそれぞれの部門が大きくなったのが今の出版業界ですが、この一四〇年余りで分業化して拡大していったそれぞれの要素が、今又縮小し始めています。当社としては、その拡大する前の時点でのそれぞれの要素をもう一度見直し、それにデジタル・ネットワークとの融合、他社との共同事業、地元企業との協業などを取り込み、再構築して新しい業態ができないかを模索し始めています。出版社としての「創元社」という会社そのもののブランディングに注力していこうと考えています。

## ダイレクトマーケティング

かつて版元↓取次↓書店（実店舗）の販路は、当社にと

って九〇%近い売上があった正に正常ルートだったので、今では五〇%を割り込んでしまいました。これは当社が変わったというよりも、一人一人の読者の要望が多様化したことによるものです。この変化した読者の要望に応えるため、読者とのコミュニケーションを円滑に活性化させながら、いかにして読者に満足してもらえるのか。読者との関係性をさらに濃密にできないのか。これが我々に与えられた課題です。今は、たった一人の読者からの意見が大きき力を持つ時代です。過去の当社においては思いもしなかったような読者の要望に向き合い、その具体的な解決策を生み出すことが、これからの最も大事な仕事であると考えています。

以上のようなことから、当社として重点的に行おうとしているのはダイレクトマーケティングです。デジタルの本質である双方向性、コミュニケーションを重視し、直接読者と関わるためにSNSやHPに注力し、何より読者、顧客の要望をどのように吸い上げるかに注力しています。以下、具体策を列挙してみます。

### 具体的な施策

#### ① 企画について

我々が世に問いたいと思う企画を、いかに読者を選んでもらうか、プロダクトアウトとしての企画にマーケティングの考え方をどのように組み合わせるのかを考え続



## 新刊案内

けることを大前提とし、そのために年間スケジュールを策定し、編集部内でこまめにうちあわせをすることにより刊行スケジュールを守っています。四ヶ月前にはタイトルや装丁を確定させ、また、JPROへの登録を充実させることにより、業界への情報発信を迅速に行っています。

### ② ネット書店対応

書誌情報を迅速にサイトへ揚げています。また、カート落ちを防ぐために、できる限り事前に情報をつかみ、一時的な売上増によるカート落ちが発生しないように気をつけています。更には商品頁を充実させ、ネット書店側の企画にも前向きに協力しています。

### ③ 電子書籍

電子書籍化はまだ刊行点数の六〇%程度ですが、翻訳書の電子化にも目処がつき、徐々に売上高は増加しています。しかし、コミックの販売に見られるような売上比率にはまだ遠く及ばず、当社内での売上比率は全体の六、

七%に止まっています。

### ④ HPの充実(情報提供、通販)

HP閲覧者の七〇%がスマホからコンタクトしてきているので、スマホユーザーを閲覧者の中心に考えています。そのため、書誌情報の提出を四ヶ月前に設定し、情報の早期提出、情報量の拡大に着手してきましたが、これらの成果として、自社ネット通販の売上は年々伸びています。その他には、訳あり本販売(カバー無しや汚損本を割引きして販売)、HP限定販売商品(通常商品と装丁が違うもの…手帳)の販売、プレゼントラッピング(クリスマスや新入学など)などをサービスとして展開しています。

### ⑤ SNSでの情報発信

編集者や営業担当者が毎日何通かの発信を行っています。情報発信に使用しているSNSの種類は、ツイッター(公式2・商品7・編集者4)、インスタグラム(公式・キャラクター2・商品)、フェイスブック、YouTube、noteなどです。今後は動画に注力していく予定です。

編者=SGCME 執筆者 土肥誠 菅原陽心 築田優 徐一書 松尾秀雄 樋口均 クオックリエマリ 佐藤公俊 澤田貴之 清沢洋 河村一 田中史郎 田中裕之 菊判cuncu 買定価6380円

山水英計 編著 執筆者 永野善子 松本和也 松岡昌和 高城玲山本博史 福浦一男 関根康正 村井寛志 鶴園裕基 八尾祥平 知花愛実 泉水英計 200頁 定価9900円

**アジア経済の現状とグローバル資本主義**  
改革開放政策を打ち出した1978年から40年ほどで、世界第二位の経済大国となった中国 民主主義を国是とし、自由主義経済体制をとるアメリカが現代世界経済の両巨頭として並び立っている。現代は現実の進みが早く、理論が現実には追いつかない。それでも現実の分析をやるわけにはいかない。

**近代国家と移民地性——アジア太平洋地域の歴史的展開**  
パンデミックというグローバルな現象が皮肉にも国民国家の存在を先鋭化し、国家間にも国家の内にも残る植民地主義の影響を明るみに出した。近代国家と植民地性の歴史的展開はアジアにおいて多様な展開をしめた。その個々の展開を本書の論文が探求している。

## 御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20  
電話03-5684-0751

## ⑥ メール配信

読者（顧客）マスターを作成して、既刊本の購入履歴の参照結果を元に、新刊刊行のメールを事前に送付したり、記念日等のデータと購入履歴を参照してメール告知を行ったりしています。また、自社イベント企画の告知や、メールマガジンの発行も適宜送付しています。

## ⑦ 関連セミナーの開催

特に専門家向けセミナーの集客が好調です。また、セミナー受講者は専用HPでの書籍購入も活発で、こちらも売上に貢献しています。当社では、他社の書籍もお預かりして販売しております。

## ⑧ HP作成・SNS発信強化のための組織変更

社内委員会方式を採用し、マーケティング委員会（月二回）、HP・SNS委員会（月二回）、一三〇周年イベント委員会（適宜）で機動的に決定、運用しています。委員会メンバーは編集、営業、管理から横断的に採用していますが、問題点は残念ながらもまだたくさん残っています。

## ⑨ 読者（顧客）管理システム

顧客管理システム（Sales Force）を導入しています。運営コストの捻出は、新聞広告費の一部を流用することにより実現しました。

## おわりに

江戸時代に組織された「本屋仲間」という言葉が私は好きです。出版業界と他業界との違いを表しているようにも思えます。この先、我々はそれほど大きな規模の業界になることはないのかもしれませんが、各社が出版するそれぞれの刊行物を手にする一人の読者について、仲間全体で対応できないのかということも考えています。ルールや経済的な条件を決めて、お互いの読者データを読者のために有効活用できないのか。それができれば、中小規模の出版社でも今の時代の壁を乗り越えて次の時代に新しい風を吹かすことができるのではと思っております。

今後、一人一人の読者に満足してもらうのは、ますます手間がかかり、大変ですが、そこに出版の醍醐味もあるのではないのでしょうか。また、「出版」という古い言葉の示す範囲はますます拡がっていくでしょう。それともコンテンツビジネスというような他の言葉に変わってしまうのでしょうか。それがどうなるのかはわかりませんが、それぞれの出版社（版元という言葉がまだ生きています！）は何を選択して、自社の事業としていくのか。その結果は、今までの出版社像とは違うものになっているかもしれないですが、今我々が体験しているプロセスこそが、明治二〇年問題で先人達が味わった変化というものの「興行き」ではないでしょうか。



## 学術出版の「バックヤード」

黒田拓也（東京大学出版会専務理事）

### 既存の出版流通プラットフォームの重要性への再認識

名古屋大学出版会の橘宗吾氏は、かつて「学術書を出版する意味——情報化のなかの知識・流通・読者」（『大学出版』一一八号）のなかでこう述べています。

……大事なのは、研究書も、教科書・教養書も、主に（ネット書店を含む）書店を通じて流通しているということである。しかも他の、いわゆる一般書などと一緒に……諸外国と比べて書籍、なかでも研究書は相対的に安価で買える状態が続いてきた。つまり研究書が相対的に安価で、比較的入手しやすく、広い層の人々の目に触れる機会をもってきた、ということであり、その点が重要なのである。（同号、一九二〇頁）

筆者もこの橘氏の見解には全く賛成です。これまで培ってきた日本の出版流通の仕組み、それによって日本の知識

層の厚みが保持され、日本の国力を支える源のひとつになっていると言っても過言ではありません。それだけにその「出版インフラ」の維持・発展は重要な問題ですが、過去十数年を振りかえってみると、その仕組みは棄損されていく歴史であったと言ってもよいだろうと思います。

一九九六年に売上のピークを迎え、それ以降出版市場は縮小の一途をたどってきたなかで、きわめて大きなダメージを受けたのが、読者に本を届けるためのアクターである、販売会社（取次）と書店です。細かなデータではもう振り返りませんが、いま（二〇二二年五月時点）に至るまで書店の数は減少し、書店のない街も相当に増えてきました。また、東日本大震災によって経済を支えるさまざまな構造に影響が及んだこともあいまって、二〇一五年には老舗の取次である栗田出版販売が民事再生を申請し（二〇一六年に大阪屋栗田として大阪屋に吸収）、準大手の取次であった大洋社

が自主廃業（二〇一六年）しました。さらに時間を遡れば、二〇〇一年の鈴木書店の倒産は専門書出版のあり方に大きな影響を与えています。

これらのことは、学術出版を支える大きな土台が細っていき、諸外国に比べて幅広い、知的基盤そのものが脆弱になっただけのことにつながっています。

取次を中心とした既存の出版流通のあり方にはこれまで多くの課題が指摘されてきましたが、筆者自身は橋氏同様、いま動いている仕組みは日本の知的光景を支える最も重要なものと考えています。そのなかでは、販売会社（取次）と自社との取引において、双方ともに不利益とならないような工夫の実践が必要です。また、読者にとって利便性が高く大きな存在となった大手ネット書店との連携もやはり重要でしょう。日本の歴史ある出版流通プラットフォームが非常によく出来ていることを改めて高く評価し、その仕組みをより活かしていきたいと思えます。

### 下降局面が続くなかで有効な策はとれるのか

量的なパイの拡大を見込むことができず、かつ売上が減少していき投資余力を確保することもできないときに、そうした事態を乗り越えるための有効な策をとれるのか、これは筆者が特に持ち続けてきた問題意識です。

乗り越える術としては、頭の中ではいくつか考えられるでしょう。例えば、苦しい状況のなかでも新しい動きを的

確にキャッチし、成長の種をみつけ芽を育て、それを有力な事業として成長させていくこと、また、既存の事業のなかで、新たなメディアの活用などによって「横展開」できるものを考えていくこと、などです。他にもさまざまなアイデアは出てくると思いますが、そうしたものには、やはり、金銭的にも人的にも先行投資が必要になり、新たな事業を軌道に乗せるまでの時間を確保する「体力」が必要になります。

先に振りかえった歴史のなかで、お金も「体力」も消耗している中小出版社、例えば筆者が所属する東京大学出版会のようなところには、そうした物量を伴う「先行投資」を前提とした取り組みは、残念ながら、やりたくてもやれない、ディレンマそのものでした。

### 貧者のもがき、もしくは知恵？

かといって、出版を継続し、過去の成果も未来につなげていくためには、諦めは許されません。そんな「貧者のもがき」ともいうべき状態のなかで動き出したものがありました。一つは、慶應義塾大学メディアセンターと学術・専門出版社有志を中心に行った「電子学術書利用実証実験」と、もう一つは、出版業界を支える大きなアクターとして登場してきた大日本印刷の方々との連携作業です。

#### 「電子学術書利用実証実験」

「電子学術書利用実証実験」は、二〇一〇年から二〇一

三年度にかけて実施されました。そこには、出版社側から見ると、以前から電子書籍というものを、出版の拡張に資するものとしてどう位置づけ、市場全体を拡大させていくことにいかに活用するかという問題意識がありました。出版社が持つコンテンツを有効かつ持続的に活用してもらうためにはどのような仕組みが必要なのか、実際想定される読者層の意見をできるだけ吸い上げ、学術・専門書出版社ならではの展開を行うための知見を得ようとなりました。二〇〇八年頃から慶應義塾大学メディアセンターの方々は個別に意見交換をさせていただいて、その中で出たアイデアが、こうした大きな取り組みにつながったのは実に幸運でした。結果、その議論のプロセスの中で、その後「6社版元会議」と名付けられ、電子出版のみならず、さまざまに浮上する課題を共に考えていく恰好の場が形成されました（慶應義塾大学出版会、勁草書房、東京大学出版会、みすず書房、有斐閣、吉川弘文館の6社）。さらにこの6社が中心になって、丸善株式会社（当時。現丸善雄松堂）、京セラ丸善システムイ

ンテグレーション株式会社（当時。現京セラコミュニケーションシステム）と共に、大学図書館・研究機関を対象とした「新刊ハイブリッドモデル」のサービスを二〇一四年九月から開始しました。同サービスは学術書の新刊を冊子体と電子書籍をセットにしたハイブリッドモデルで販売するもので、コンテンツの配信は電子図書館プラットフォーム「Booklooper」と、電子書籍閲覧サービス「Maruzen eBook Library」を通じて行うかたちとして実現し、現在に至っています。

大日本印刷と丸善雄松堂との連携後者はあるきっかけから動き出しました。二〇〇九年後半、当時丸善株式会社の社長を務められていた小城武彦氏（現九州大学教授）が東大出版会を訪問されました。東大出版会は二〇一〇年初頭に刊行する高額書籍『新老年学 第三版』を医書の販売に強い丸善の外商部門にアプローチをかけていたこともあって、社長直々に訪問して様子を見て来てくださったのだと思います。当時筆者は営業部門の責

高まるアイヌ文化へのまなざし！  
ひと・もの・ところから読み解く  
初めての総合辞典！

## アイヌ文化史辞典

6月下旬  
発売!

関根達人・菊池勇夫・手塚 薫・  
北原モコットウナン編

約1000項目を図版を交えて解説。

15400円

「内容案内」送呈

◆推薦します

佐々木史郎  
(国立アイヌ民族博物館長)

野田サトル  
(漫画家)



## 近世都市 (江戸)の水害

災害史から環境史へ 3960円  
渡辺浩一著 災害を自然と人間との  
相互関係として捉える注目書。

## 近世感染症の 生活史

医療・情報・ジェンダー  
鈴木則子著 江戸時代の感染症を  
めぐる苦悶や矛盾―。そこから何を  
学ぶか？ 3520円

## 家と子どもの 社会史

日本における  
後継者育成の研究  
鈴木理恵編 各地でのフィールド  
調査等に基づき、「家」の後継者育  
成を実証的に解明。 7700円

## 変体漢文 (新装版)

峰岸 明著 方法論や表記・語彙・  
文法・文体を解説。日本語学の観  
点から概説した名著。 6600円

## 〈洗う〉文化史 [2刷]

「きれい」とは何か 2420円  
国立歴史民俗博物館・花王株式会社  
編 様々な事例をもとに分析。  
現代社会の清潔志向の根源を探る。

## 気候適応の日本史

人新世をのりこえる視点 [2刷]  
中塚 武著 古気候復元の最新デー  
タと史資料を照合して描く初の通史。  
(歴史文化ライブラリー) 1980円

## 吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8  
電話03-3813-9151 / 価格は税込

任者をしており、東大出身でもある小城氏がせっかくなられるのであるから、電子出版につながりそうな東大内の取り組みをいくつか紹介し、そうしたものをビジネスにつなげる可能性はないものかと考え、いくつかの情報を小城氏に話しました。そのことを小城氏は少し面白そうだと思ったださったのか、当時すでに進んでいた丸善と大日本印刷との提携関係もあって、後日、双方から数名ずつ東大出版会にお越しになり、いろいろと意見交換を行う機会を得ました。結果、そのあと定期的に会合を持ち、何か具体的な取り組みにつながれないか模索していくことになったのです。この定期会合からその後具体的な新規事業のようなものが生まれたわけでは必ずしもありませんが、先の慶應義塾大学メディアセンターとの「電子学術書利用実証実験」において、大日本印刷さんがオーサリングを担当されて実験の大きな部分を支えてくれたり、丸善さんとは先に述べたように「新刊ハイブリッドモデル」サービスタといういまにつながるビジネスのパートナーとしてさまざまな施策を協働しています。

ここで紹介した二つの取り組みにおいては、われわれ自身は、お金の「実額」という意味では大きな「投資」は行っていません（慶應義塾大学さんや大日本印刷さんに多くを支えてもらったことは確かですが……）。ある程度共通した問題意識を持つアクターが集まり、議論を重ねていくなかで共通の目標を立て、その実現のためにそれぞれが根気強く動い

てくれたからこそ、いまビジネスにつながるものになり、先に紹介した6社にとっても、Maruzen eBook Libraryを中心とした機関向け電子書籍販売の売上は小さいものではなくなっています。もがいたなかでの一つの大切な事実と言えるかもしれません。

### 「出版DX」、どこに向かっていくのか

このコロナ禍で大きく伸展したように、デジタルトランスフォーメーション（DX）の流れはより加速していくでしょう。五十歳台も半ばにさしかかった筆者にとっては、もはやその周辺にしか生息できないとは思いますが、いくつかの可能性について言及してみたいと思います。

一つは、出版社内部のものです。編集・製作のプロセス、在庫管理など諸業務の効率化、さまざまな情報の管理、コミュニケーションなどといったところの整備をさらに進める必要があります。ただこのとき、経営判断をする人たちが、IT技術や仕組みそのものについて適切に理解し、無駄な投資をしないように注意しなければなりません。

二つめに、外への発信、主に商品のプロモーションです。現在でも行われているSNSを使った情報発信の洗練はもとより、読者との双方向型の場をつくるようなプロモーションを追求するかどうかも含めて、広い読者を獲得しようとするのが重要な日本の学術出版だからこそ、プロモーションへの高い意識は必要になってくるでしょう。

三つめに、それぞれの出版社が持つ著者やコンテンツの可能性を、新たなメディアを駆使して読者に開き、それをビジネスにつなげていくことが考えられます。すでにシラス(ゲンロン)やシノドスなどが取り組み、魅力的な発信を行っていることは参考になります。

デジタル技術の活用にはいろんな可能性が開けているとは思いますが、いかなるものでも、著者、そしてその著者と一緒につくる作品(著書)、そして読者とをいかに楽しくつなぐかという、出版社の重要な機能の一つである「媒介」を念頭に、面白い仕組みの創造に向かっていきたいものです。

## 最後に——「定常状態」へ

筆者が編集部時代到大変お世話になった経済学者の宇沢弘文先生は、ご自身が提唱する「社会的共通資本」に関する話の中で、ジョン・スチュワート・ミルがその著書『経済学原理』において語った「定常状態」という言葉をよく強調されていました。大雑把に言いますと、大きく見たと

き、マクロ的な指標は一定でも、その中身に目を凝らすと、ミクロではさまざまな活動が生き活きとなされ、ダイナミックな動きが継続されている状態です。筆者はこの考えにとても共感を覚えます。

学術出版においては、この宇沢先生の言う「定常状態」をめざすべきだと考えます。われわれが送り出す書籍は、起死回生、一発逆転となるような大ベストセラーが出る確率は高くはありません。それだけに、新しい意欲的なチャレンジを行い、若々しく質の高い作品を生み出し、それを読者と共有することによって、厚い知的基盤を維持し続け、それをまた次世代の知的活性化につなげていくためには、長く一定の規模の良循環を実現し、それが出版社の新たな取り組みを誘発していくかたちをつくる必要があります。青臭い理想論かもしれませんが、規模拡大の追求ではなく、質の追求が良循環となる仕組みを、学術出版全体、そしてそれを担う個々の出版社において実現していけたら、と切に思っています。

法的課題に斬新かつ多角的にアプローチ!

## 民事法の 現在地と未来

小林秀之先生古稀祝賀論文集



【編集委員】原強・藪口康夫・畑 宏樹・村上正子

小林秀之先生のご祝いを祝し、第一線で活躍する研究者・実務家32名が、民事手続法をはじめ民事実体法、国際民事訴訟法、比較法、交渉学、法と経済学など多彩なテーマに果敢に挑む。

●定価14,300円(税込)

<分断>の諸相をさぐり、  
処方箋を追求する15篇

## <分断>と憲法

—法・政治・社会から考える



新井 誠・友次晋介・  
横大道聡【編】

国民統合や再配分の問題に深く関心をもつ憲法学を中心に、社会における様々な「分断」がもたらす諸問題を、具体的な処方箋も示しつつ多角的に考察。

●定価2,750円(税込)

弘文堂

101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7  
<https://www.koubundou.co.jp/>

# 大学出版部ニュース

表示価格は税込です。

## 大学出版部協会・活動報告

- 一月二一日(金) 第八回 営業部会
- 一月二八日(金) 第七回 理事会
- 二月一七日(木) 第五回 編集部会
- 二月一八日(金) 第八回 理事会
- 二月二五日(金) 第九回 営業部会

## 二月二八日(月)

※連続オンライン講演会「学術出版を語る」<sup>3</sup>

『学術出版の未来形—コンテンツ販売からサービス提供へ』共催・日本出版学会) 講師・金原俊(医学書院代表取締役社長)

三月一八日(金) 第一〇回 営業部会

三月一八日(金) 第九回 理事会

## 四月一一日(月)

※連続オンライン講演会「学術出版を語る」<sup>4</sup>

『出版の未来、出版社の未来—多様な読者の求めるもの』共催・日本出版学会) 講師・矢部敬一(創元社代表取締役社長)

四月一四日(水) 第六回 編集部会

四月一五日(金) 第一一回 営業部会

四月二二日(金) 第一〇回 理事会

(すべてZOOM開催)

## 北海道大学出版会

▼橋場典子著『社会的排除と法システム』(A5判・二八八頁・五五〇〇円) 法は社会的弱者をいかにして包摂できるか。法システムからの疎外状態の克服には何が必要とされているか。法が果たす役割を問う。

▼関孝敏・松浦尊磨・藤田益伸編著『居宅介護と変容する家族像をさぐる—「ホームホスピス」への取り組みを手がかりとして』(A5判・二八〇頁・三七四〇円) 看護師・医師や弁護士・看取り士など三三名が、人生のターミナルポイントに焦点をあてケアとケアをさぐる。

▼田本はる菜著『山地のポスト・トライバルアース—台湾原住民セテックと技術復興の民族誌』(A5判・三三二頁・七四八〇円) 台湾原住民セテックの「織り」の技術的実践の民族誌。素材・道具・身体とそれらの変容も視野にいれ、変化の可能性に開かれた技術的営みを描く。

▼関谷由一著『万葉集羈旅歌論』(A5判・三三四頁・七七〇〇円) 第一部で「家の妹」を恋慕う様式の成立と定着について、第二部で万葉集羈旅歌の特質について論じる。



## 弘前大学出版会

▼平井太郎編著『SDGsを足許から考えかたちにする』（A5判・一九〇頁・一六五〇円）今、地域の現場でも話題となることが多い「SDGs」。国連が世界全体で共有すべく掲げた「持続可能な開発目標」のことだ。だが、それだけに、それぞれ地域の現場で、どう受け止めてよいのか、わかりにくいのが実情だ。そのためか、とかく今までやってきた延長でいい！という声も耳にする。いや、そんなことはないはずだ。では、どこから手を付けたらよいのか。何が肝なのか。そうした悩みを抱える現場のみなさんに本書を届けたい。キーワードは「足許から考える」と「考えたことをカタチにする」。積み重ねた実践を、みなさんともぜひ共有したい。

▼Radiation Environment and Medicine 編集委員会編『Radiation Environment and Medicine Vol.11 No.1』（A4変形判・三九頁・一二一〇円）被ばく医療に関わる最新の知見を網羅した総説や原著論文を中心に放射線科学の論文を掲載した英文学術誌。今号では、放射線生物影響、放射線計測等の6報の論文を掲載。

## 東北大学出版会

▼セツポ・サジヤマ、マツティ・カンピネン著／木下喬訳『現象学入門―歴史的観点から』（A5判・一九四頁・二七五〇円）本書はフッサールの現象学の基本概念である指向性に焦点を当てた入門書である。この概念の歴史的背景を、アリストテレスに遡り、中世哲学を経てイギリス経験論の哲学などを渉猟して幅広く解明している点に特徴があり、一九世紀末からのブレントラーノ、フレーゲとフッサールの考えが「内容理論」と「対象理論」の対比を軸に述べられる。

▼ウエルナー・マルクス著／木下喬訳『アリストテレス「存在論」への導き』（A5判・一一四頁・二二〇〇円）本書で試みられているのは、アリストテレス哲学における「ある」というかぎりでのあるもの（*on heion*）の学問へと「導くこと」である。いわゆる「存在論」と言われてきたヘーゲルに至るまでの西洋の伝統的な哲学的思索を決定的に規定してきた学問とは何であったのかを、アリストテレスの『形而上学』に基づいて明らかにし、その哲学的基礎づけの作業へと至る明確な道筋を指し示す。

## 流通経済大学出版会

▼小谷究・三倉茜著『女性コーチ―それぞれの歩み』（A5判・一九二頁・一七六〇円）女性コーチの実際について理解を深め、今後コーチになりたい女性アスリートが増えることに期待を込めて……。



▼新井博・小谷究編著『スポーツ技術・戦術史』（A5判・二八〇頁・二二〇〇円）スポーツの個別史の研究に長い間取り組んできた研究者達が各種目の技術・戦術史で重要と思われるテーマや時期について、自由に取り上げた一冊。





## 聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・重安智子・井口厚子・関口明子著『教職実践演習―幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために』（B5判・一四〇頁・一七六〇円）  
幼児教育に携わるために学んできた総まとめとして、いじめ、食育、特別支援教育や、幼・小連携、家庭や地域との連携の大切さを具体例を挙げて説明。総合的な実践的指導力の基礎を修得できる一冊。  
▼宇佐美博子・河村久・神田由紀・黒須利夫・小林芳枝・長橋雅俊・松井孝夫・八木正一著『教職実践演習』（B5判・一四六頁・一七六〇円）中学校・高等学校教諭を目指す方に向け、教職課程の振り返りから生徒指導要録・通知表の記入の仕方まで解説。教職の魅力が満載。  
▼聖徳大学特別支援教育研究室編『一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援改訂2版』（A5判・二四九頁・一七六〇円）初学者のための特別支援教育本。コンパクトなハンディサイズに、全障害について、子どもの理解と指導・支援に必要な基礎的知識を盛り込んだ一冊。

## 慶應義塾大学出版会

▼河野龍太郎著『成長の臨界』（四六判・五二八頁・二七五〇円）繁栄は永遠に続くという幻想を極限まで漲らせた地球風船はどこまで膨張すれば気が済むのか。新しい秩序は形成されるのか。著名エコノミストが経済・金融の視点だけでなく政治学・歴史学・心理学の見識も踏まえて怜悧に現況を分析する、読み応え十分の一冊！

▼谷原史著『サラリーマン』のメディア史』（四六判・二八八頁・二四〇〇円）ほとんどメディア史で扱われない「普通の人々」サラリーマン。昭和・平成の映画「社長シリーズ」、雑誌「BINGO tomorrow」「プレジデント」、「課長島耕作」、「半沢直樹」等のメディアを通じ、メディアとサラリーマン相互を描く。はたして我らがいないサラリーマンなのか？  
▼S・ジェフリーズ著『美とミソジニー』（四六判・三五二頁・三二〇〇円）美しくなるうとするのは、「個人の選択」なのか。美容を、女性から金と時間と健康を奪う有害な文化習慣と捉え、家長長制の抑圧とネオリベリズムの欺瞞を痛烈に批判するラディカルフェミニズムの書。

## 専修大学出版局

▼島蘭進・四ノ宮成祥編著／木賀大介・須田桃子・原山優子著『合成生物学は社会に何をもたらすか』（四六判・一八二頁・一九八〇円）生命をつくる時代が始まっている！ 遺伝子治療や感染症対策など多くの可能性を持った合成生物学、はたしてそのテクノロジーを統御することができるとは何か。合成生物学とは何か、社会に何をもたらすのかを考える。

▼土屋昌明編／専修大学社会科学研究所社会科学研究叢書二四『異文化社会の理解と表象研究』（A5判・四〇六頁・四七三〇円）仏米墨中日の多様な地域における映像を中心とした視覚文化や文字表象と社会との関わりをみる。また視覚資料や映画監督等へのインタビューなど従来の文字以外の資料に基づいた視点で多文化社会の視覚表象を追究する。口絵に趙銀鷗作品を掲載、佐藤東弥監督、柳島克己カメラマン、野中章弘氏、趙銀鷗氏、趙亮監督らへのインタビュー収録。

## 玉川大学出版部

▼広松由希子著『日本の絵本 一〇〇年一〇〇人一〇〇冊』(A4判・二二四頁・七七〇〇円) 著者が所蔵している絵本のなかから、それぞれの作品に魅せられ、読み込んできた愛着の深い一〇〇冊を選。絵本の視覚的側面を重視し、場面数をオールカラーで紹介しながら一見開きに一作品を解説する。日本の絵本作家・イラストレーターの大正から平成までの約一〇〇年の歴史を辿り、新しい絵本文化の創生へとつなぐ。巻末に絵本年譜(一八七〇—二〇二〇)、索引、参考文献を掲載。

▼武藤ゆみ子・岡田浩之著『A1とうまくつきあう方法』(A5判・一五二頁・一七六〇円) これからの社会では人工知能(AI)についての知識が必要というけれど、なんだか難しそう……と思うことはないだろうか? 本来に必要なのはプログラミングなどの技術そのものではなく、その技術をどう活用するかという論理的な考え方を身につけること。本書でAIとうまくつきあい、その知恵を社会に活かす方法を学ぶ。

## 中央大学出版部

▼堤和通編著『米国刑事判例の動向VIII』(A5判・六二四頁・八一四〇円) 過去三十年に及ぶ米国最高裁判例の評釈。黙秘権に係る権利章典条項の歩みと到達点を解説する。被疑者取調べや公判構造など日米比較法の重要論点を網羅。ミランダ法理、証拠排除の他、イミュニティなど権利保障の全体像を示す。

▼星野智編著『アントロポセン時代の国際関係』(A5判・三一〇頁・三八五〇円) アントロポセン時代を視野に入れつつ、アントロポセンの地球環境と平和、「戦争の世紀」としての二十世紀、国際公財としての南極ガバナンスとその課題、ハイドロポリティクス、アメリカの国境管理政策などの問題を究明する。

▼西川可穂子・中野智子編著『グローバル化による環境・社会の変化と国際連携』(A5判・二九六頁・三七四〇円) グローバル化する環境・社会の問題に対し、日本はアジアの国々とう連携するべきか。草原の国モンゴルにおける気候変動と農牧業を中心に、伝統的な食や葉SDG、日本・モンゴル関係の歴史など様々な視点から読み解く。

## 東京大学出版会

▼木山幸輔著『人権の哲学—基礎的価値の探究と現代世界』(A5判・三六八頁・六二〇〇円) 人が人であるがゆえに持つ人権。その正当化の根拠とは。「自然本性的構想」と「政治的構想」との論争を詳細に分析し、新たな方向性を示す。第11回東京大学南原繁記念出版賞受賞作。

▼江口怜著『戦後日本の夜間中学—周縁の義務教育史』(A5判・七一二頁・二〇〇〇円) 教師たちの思想、教育制度との葛藤、周縁化の中の苦闘を描き、「生きられた学校」の歴史像を捉える。第11回東京大学南原繁記念出版賞受賞作。

▼古川安著『津田梅子—科学への道、大学の夢』(四六判・二一六頁・二八〇〇円) 女子英語教育の先駆者津田梅子は優れた生物学者だった! 科学とジェンダーの視点から梅子とその時代を描く話題作。

▼中井和夫著『ウクライナ・ナシヨナリズム—独立のディレンマ』(A5判・二八八頁・七二〇〇円) ヨーロッパとロシアのあいだで揺れ続ける、旧ソ連の大国ウクライナ。第二次世界大戦からペレストロイカに至る軌跡と独立のプロセスを描き出す。一九九八年刊行書の緊急復刊。

## 東京電機大学出版局

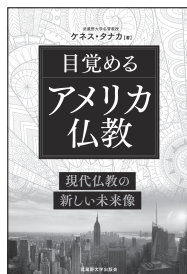
- ▼島田政信著『宇宙からの地球観測―地球物理量の計測原理』（A5判・二六四頁・三九六〇円）地球の物理量（温度・周波数など）を宇宙から計測し、地球の状態を把握する技術について、初学者向けに体系立ててまとめたテキスト。人工衛星によるデータの取得方法やその原理、データの処理法について解説。JAXAに所属し長年にわたり宇宙の研究に携わった著者ならではの視点でまとめた。
- ▼村木正芳著『よくわかるトライボロジ―』（A5判・二二二頁・三一九〇円）トライボロジ―全般の基礎を容易に学べるよう、初学者向けにまとめた。全15章構成とし、教科書として使いやすいように配慮。最近の研究成果や、トライボ設計に使える式を適宜盛り込むなど興味ある内容にまとめた。
- ▼吉川忠久著『第一級アマチュア無線技士試験 集中ゼミ』（A5判・四三二頁・三四一〇円）出題のポイントを絞り込み、項目ごとにわかりやすく解説。練習問題は、頻出問題を中心にして豊富に収録し、計算問題は、式の展開を省くことなく丁寧に解説。

## 法政大学出版局

- ▼西田勝著『満洲文学』の発掘』（四六判・五四〇頁・六三八〇円）二〇二一年に逝去した著者は、国内外の作家・研究者との協働のもと、知られざる満洲文学の実態を明らかにしてきた。本書は三〇年以上をかけたその畢生の仕事である。
- ▼水田恒樹著『産業革命の原景―英国の水車集落から米国の水力工業都市へ』（A5判・二七八頁・五二八〇円）産業革命には蒸気力の時代に先立つ水力の時代があった。英米の水力工業の実態を明らかにし産業遺産の保存と活用にも言及する。
- ▼B・マンデヴィル著／壽里竜訳『名譽の起源 他三篇』（四六判・四二八頁・五二八〇円）主著『蜂の寓話』の完結篇として書かれたキリスト教批判の書『名譽の起源』をはじめ人間の本性にさまざまな角度から迫る先鋭的な著述を初邦訳。
- ▼金歌昊著『積み重なる差別と貧困―在日朝鮮人と生活保護』（四六判・三九〇頁・四一八〇円）在日朝鮮人の生活保護は「不適正」な「特権」なのだろうか。さまざまな歴史資料をもとに、現在まで続く民族差別と貧困の道のりをたどる。

## 武蔵野大学出版会

- ▼ケネス・タナカ著『目覚めるアメリカ仏教―現代仏教の新しい未来像』（四六判・二七二頁・二五三〇円）現在、欧米では仏教が伸長し続けている。仏教は「西洋の壁」を超え、「東洋」に限るものではなくなったのだ。アメリカ仏教の歴史や現状、特色や代表的な人物、組織などから、その意義や影響力を解説する。



- ▼樂殿武・柴田幹夫編著『日華学堂とその時代―中国人留學生研究の新しい地平』（A5判・五五二頁・四六二〇円）日華学堂に関する日誌を基にして、清末の留日学生史の一端を明らかにする。日華学堂の学生たちを通じて、留學生派遣の背景、学堂の教育と経営、学生たちの生活、留学中の勉強と活躍、帰国後の活動などを紹介したほか、高楠順次郎を始めとする教員たちの献身的な教育活動を、豊富な資料と共に解説している。

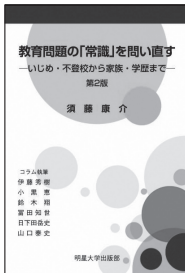
## 武蔵野美術大学出版局

▼寺山祐策監修『ヴィジュアル・コミュニケーション・デザイン・スタディ 視覚伝達デザイン学科学研究室が目指すもの』（A4判変型・二四〇頁・三六三〇円）勝井三雄は「教場はアパンギャルドな創造の器である」と明言した。教育の現場は既存デザインの再生産の場ではなく、学生と教員が「今と社会」に對峙し、絶えずデザインとは何かを問う研究の場であり、新しいコミュニケーションの場たちを模索する実験場であると主張した。本書では、これを実践するためのカリキュラムが編まれた経緯、その成果である卒業制作一七〇点を一五のカテゴリで紹介し、身体性を重んじる独自の教育メソッドを開示する。

▼西本企良著『アニメーション 想像をいざなう形と動き』（A4判変型・一四四頁・二五三〇円）フェナキステイスコープの原理を序論として、写真・映画の誕生、コンピュータを介在させる手法まで、具体的な技法を提示しつつ知覚の探求と表現の可能性を追究する、美大で学ぶアニメーションの「造形原理」。QRコードを配した画期的な動く技法書。

## 明星大学出版部

▼須藤康介著『教育問題の「常識」を問い直す―いじめ・不登校から家族・学歴まで 第2版』（四六判・二七〇頁・一九八〇円）本書は、様々な理論やデータを紹介し、世間一般で語られている教育問題のどれが本場で、どれが誤解なのかを検討して行く。そして、本当だとしたらその解決方法、誤解だとしたら誤解が生じている理由を考える。



▼樋口修資著『教職志願者のための教育法の基礎』（A5判・四九八頁・三五二〇円）本書は最新の教育法令の改正動向等を踏まえて、二〇一五年初出の『最新教育法の基礎』を大幅改定し、教員及び教員志願者が理解しておくべき最新の教育法規の基礎的・基本的知識を全十六章にわたってまとめたもの。

## 早稲田大学出版部

▼渡邊義浩著『大隈重信と早稲田大学』（新書版・二九四頁・九〇〇円）早稲田大学の創立者で知られる、大隈重信の没後一〇〇年。「成功より失敗が多い。失敗に落胆しなされる」と卒業生に語った言葉は名言として語り継がれている。その過去・現在・未来を本書は照射する。

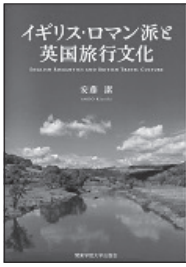
▼早稲田大学出版部編『平和宣言』全文を読む『ヒロシマの祈り』（新書判・二四八頁・九〇〇円）第一回平和宣言から七十五年が過ぎた。核兵器の削減は進まない。平和宣言全文に加え、歴代3市長のロングインタビューを収めた本書は、核廃絶と世界平和実現の道筋を示す。

▼藤井省三著『村上春樹と魯迅そして中国』（新書判・二六〇頁・九〇〇円）村上春樹の文学世界を読み解く「記号」は中国であると考える著者が、「猫好きの村上春樹」と「猫嫌いで小鼠好きの魯迅」を照らし合わせることで、二人の文学世界を掘り下げる。村上文学の深淵に迫る！

## 関東学院大学出版会

▼安藤潔著『イギリス・ロマン派と英国旅行文化』（A5判・三三二頁・三三〇〇円）

本書は18世紀以来の英国の旅行文化について考え、湖水地方、ウエスト・カントリ、ワイ川、スコットランドを巡り、ロマン派詩人ワーズワス、コールリッジ、キーツらの旅を採った研究である。写真も著者自身が現地を訪れて撮影している。序章 英国旅行文化論の試み 第1章 英国湖水地方の旅行文化 第2章 ワーズワスの「湖水地方案内」 第3章 エコロジストとしてのワーズワス：「湖水地方案内」後半 第4章 18世紀のワイ川下り 第5章 ワーズワスとコールリッジの邂逅 第6章 『リリカル・バラッズ』への道 第7章 ワーズワス兄妹とコールリッジのドイツ旅行：1798、99年 第8章 スコットランド、1820年。



## 名古屋大学出版会

小会は今年創立40周年を迎えます。それを記念し、品切れ本10点の一斉増刷を行うとともに、新装復刊シリーズをスタートさせました。

▼創立40周年記念増刷：『ロシア原初年代記』、『ペトラルカ カンツォニエーレ』、『アリオスト 狂えるオルランド』、佐藤彰一著『修道院と農民』他（計10点）

▼リ・アーカイヴ叢書（新装復刊シリーズ）：安藤隆穂著『フランス啓蒙思想の展開』、橋川文三著／筒井清忠編・解説『昭和ナショナリズムの諸相』、森際康友編『知識という環境』、米山優著『モンドロジの美学』、渡辺誠著『日韓交流の民族考古学』、高橋友子著『捨児たちのルネッサンス』、早川操著『デュイの探究教育哲学』、佐々木雄太著『三〇年代イギリス外交戦略』他（計15点）

▼名古屋大学編『名古屋大学の歴史 一八七〇〜二〇一九』（上下巻・A5判・二八四／三二〇頁・各二九七〇円）「名大」に歴史あり――。どのように生まれ、変化してきたのか。ノーベル賞受賞者が続出した理由とは？ 多数の写真とともに全体像を描く。

## 名古屋外国語大学出版会

▼根無一信著『ネム船長の哲学航海記 I ソクラテスからの質問 いつでもどこでも誰にでも善いものは存在するか』（A5判・二〇〇頁・二二〇〇円。仮題・予備）初めて哲学を学ぶ人のための画期的な入門書。全ての人間を感動させる歌はあるのか、美味しいものが美味しいのはなぜ？……わかりやすい問いかけから始まり、次々に「常識」がくつがえされていく。〈人それぞれ〉の〈相対主義〉でジエノサイドや殺人、戦争が防げるか……。ものごとの真の原因を、あるいは真の理由を追求し続け「よりよく生きること」を求め続けた、古代ギリシャのソクラテスからの呼びかけに、我々は今こそ向き合いたい。新進気鋭の人文哲学研究者が初めて書き下ろす、楽しく読める〈生きるとの〉哲学。七月刊行予定。

▼亀山郁夫・望月哲男・番場俊・甲斐清高編『ドストエフスキー 象徴とカタストロフィ』（A5判・三〇六頁・三三〇〇円）生誕二〇〇年、つねに再創造される作家の文学・美術・映画・オペラ。内外の傑出した研究者による国際シンポジウムの成果と書下ろし評論。好評既刊。



## 京都大学学術出版会

▼吉中丈志編『七三一部隊と大学』（A5判・五六八頁・三九六〇円）部隊創設者の石井四郎を筆頭に、大学が送り出したエリートたちはなぜ易々と倫理を踏み越えたか？ 戦後も医学界が一樣に口を閉ざす中、大学所蔵資料や米軍の記録から、積極関与した組織の姿を浮き彫りにし、歴史から現代への問いかけに向き合う。

▼稲村哲也・山極壽一・清水展・阿部健一編『レジリエンス人類史』（A5判・五二六頁・二七五〇円）危機を生きぬく知の視座からヒトの来た道を振りかえり、人類進化と社会の変遷の歴史を丹念に見直すことで、多角的かつ包括的にヒトの特性を捉え、これからの社会と生き方を考える。眞鍋淑郎氏・鷲田清一氏推薦。

▼京都大学大学院理学研究科MACS教育プログラム実行委員会編『京大式サイエンスの創り方―狙ってもできないことがある』（A5判・三一八頁・一九八〇円）まだ見ぬ学問の種を探せ！ 溢れる好奇心を旗印に集ったメンバーが、数理という共通言語を介して交流しながらその先にある何かを追求する。京大理学が挑む知の航海記。

## 大阪大学出版会

▼大出春江著『赤ちゃん審査会というメディア・イベント 写真帖が語る近代日本の児童保護と社会事業』（B5判・三六四頁・六三八〇円）「児童愛護」はいかにして「優生思想」に結びついたのか。戦前に大阪府堺市で開催された「赤ちゃん審査会」写真帖の復刻、及びイベントの社会的背景、意義等を歴史社会的に考察する。

▼西徳宏著『学力格差を克服する学校文化 効果のある学校のエスノグラフィ―』（A5判・四四六頁・六九三〇円）格差社会のなかで実現される公正な学校教育とは何か。「効果のある学校」がもつ文化の成立と継承の実態を描き出す。

▼金谷信子著『介護サービスと市場原理効率化・質と市民社会のジレンマ』（A5判・二六二頁・四六二〇円）準市場化された日本の介護保険サービス事業の導入から最近までの非営利組織と営利組織の行動を分析する。利用者にとって良い介護サービスの指標とはなにか。市民社会に与えてきた影響を検証する。

## 関西大学出版部

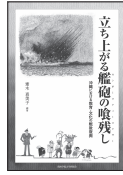
▼菊池信彦著『19世紀スペインにおける連邦主義と歴史認識―フランシスコ・ピ・イ・マルガルの生涯とその思想』（A5判上製・二四八頁・四五一〇円）「アナキズムの父」ブルードンの思想的影響を受け、スペイン第一共和政期には大統領として連邦共和制を宣言したフランシスコ・ピ・イ・マルガル。彼の思想を支えた多元的国民史認識という、もうひとつの近代国民史認識を描き出す。

▼池田進著『縄文鼻曲がり仮面―異形をめぐる顔学 人の顔または表情の識別について・補遺』（B5判・一八〇頁・五六一〇円）顔かたちを変形し装飾した日本古来の文化遺産がいくつもある。本書は縄文時代の鼻曲がり型土製仮面、歌舞伎の隈取、京町屋の小屋根を飾る鍾馭像の三題を取り上げる。その様々を観察し、視覚心理学的な考察をおこなった。



## 関西学院大学出版会

▼齋木喜美子編著『立ち上がる艦砲の喰残し―沖繩における教育・文化の戦後復興』（A5判・一一〇頁・一五四〇円）民俗学、教育学（教育史、美術教育）、児童文学を専門領域とする複数の研究者による、「沖繩」を共通の研究視座とした共同研究。



▼窪寺俊之著『金子みすゞの苦悩とスピリチュアリティ―自死をめぐる考察』（A5判・二二八頁・四四〇〇円）金子みすゞはなぜ自死したのか。遺言や作品を基に、宗教学、心理学、スピリチュアリティの視点から分析。彼女の苦悩に迫る論考。

▼佐藤善信・本下真次・相島淑美・山本誠一編著『響創する日本型マーケティング―理論と実践』（A5判・二九八頁・三七四〇円）佐藤善信門下生を中心に、日本型マーケティングの理論と実践に挑み、響かせ合い、創り続ける新たなスタートとしての11本の論考で構成。

## 九州大学出版会

▼山内昭人著『第3インタナショナルへの道―リユトヘルスとコミンテルン創設』（A5判・四三〇頁・七四八〇円）第一次史料の精緻な読解から、従来のコミンテルン創設史に再考を迫る。

▼吉弘光男・宗岡嗣郎編『犯罪の証明なき有罪判決―23件の暗黒裁判』（A5判・三二〇頁・三五二〇円）誤判事件の分析から、裁判官が誤判を犯す原因を解明し、冤罪の防止策を提言する。

▼須藤龍真著『古典インドの議論学―ニヤーヤ学派と仏教徒との論争』（A5判・五三〇頁・六九三〇円）『論理の花房』を解説し、インド哲学諸派の見解を踏まえ、インド議論学史の一端を解明する。

▼井上暁子著『語りの断層―ドイツッポ―ランド国境地帯の文学』（A5判・三八頁・五七二〇円）亡命文学から移民文学、そしてディアスポラ文学へ。ポ―ランド移民の文学的営為を読み解く。

▼加藤絢子著『帝国法制秩序と樺太住民―植民地法における「日本国民」の定義』（A5判・二五〇頁・四一八〇円）日露両国の間で樺太アイヌたち国境の先住民がたどった法的地位の変遷を探る。

## 編集後記

▼学術専門書をはじめとする硬派な本が困難な状況に直面するなか、打開のヒントを探るため「連続オンライン講演会 学術書を語る」が開催されました。今回の特集は、その講演をベースに、改めて書き下ろされた論考を取り揃えたものです。

▼不安定な情勢が続いたため一年に及ぶ長丁場となりましたが、五月の講演を以ってひと区切り付けることができました。ご参考までに、本誌掲載分の講演日は以下となります。

二〇二一年 六月二五日 江草貞治氏  
九月三日 喜入冬子氏  
二〇二二年 四月二日 矢部敬一氏  
五月一七日 黒田拓也氏

▼それぞれの論考は、各出版社の活動を反映したもののゆえテーマや性格が異なりますが、会社を牽引する立場から発せられる大局的な展望には、学ぶことが多いはずです。「本屋仲間」（矢部敬一氏）に窺われるような、他には見られない仲間意識を活かし、知恵を寄せ合い、協同して、難局を乗り切り切りたいものです。



- ダイニック(株) 〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル  
TEL 03-5402-1811 <https://www.dynic.co.jp>
- (株) 太平印刷社 〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16  
TEL 03-3474-2821 <http://www.p-taihei.co.jp>
- (株) 太 洋 社 〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1  
TEL 058-324-2111 <https://www.p-taiyosha.co.jp>
- (株) 竹 尾 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6  
TEL 03-3292-3617 <https://www.takeo.co.jp>
- (株) 東京弘報社 〒101-0051 東京都千代田区猿楽町1-2-1  
TEL 03-3291-1771
- (株) とうこう・あい 〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F  
TEL 03-5148-7200 <https://www.toko-ai.com>
- 東光整版印刷(株) 〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15  
TEL 03-3632-0801
- (株) トーヨー企画 〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7  
TEL 075-411-8288 <https://www.talligent.jp>
- 図 書 印 刷 (株) 〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36  
TEL 03-5843-9700 <https://www.tosho.co.jp>
- (株) 日新広告社 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F  
TEL 03-3263-9431 <http://www.nissinkoukokusyua.com>
- (株) 日本経済新聞社 〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7  
TEL 03-6256-7528 <https://www.nikkei.co.jp>
- 日本宣伝販売(株) 〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278  
TEL 048-620-1021 <http://www.nihon-senden.jp>
- (株) 博 報 堂 〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F  
TEL 03-6441-6711 <https://www.hakuhodo.co.jp>
- 藤 原 印 刷 (株) 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5  
TEL 03-3291-0191 <https://www.fujiwara-i.com>
- (株) 平 文 社 〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7  
TEL 03-3944-0301 <http://www.heibun.co.jp>
- (株) 毎日新聞社 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1  
TEL 03-3212-3340 <https://www.mainichi.co.jp>
- 誠 製 本 (株) 〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5  
TEL 03-3967-3952 <http://www.makoto-seihon.com>
- 名 鉄 局 印 刷 (株) 〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南3-13-23  
TEL 052-561-3272 <http://www.meitetyoku.co.jp>
- (株) 遊 文 舎 〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31  
TEL 06-6304-9325 <http://www.yubun.co.jp>
- (株) 読売新聞東京本社 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1  
TEL 03-3242-1111 <https://www.yomiuri.co.jp>

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。なお、「賛助会員」に関するお問い合わせは、協会事務局までお寄せください。

## 一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

---

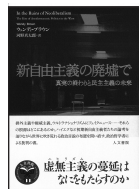
- (株)朝日新聞社 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2  
TEL 03-5540-7749 <https://www.asahi.com>
- 亜細亜印刷(株) 〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154  
TEL 026-243-4858 <http://www.asia-p.co.jp>
- (株)アベル社 〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408  
TEL 03-3235-1360 <https://www.abel-sha.com>
- 尼崎印刷(株) 〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20  
TEL 06-6494-1122 <http://www.amain.co.jp>
- (株)ALE 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階  
TEL 03-5652-8627 <http://www.adv-logi-eng.co.jp>
- 王子製紙(株) 〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5  
TEL 03-3563-7072 <https://www.ojipaper.co.jp>
- (株)加藤文明社印刷所 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE  
TEL 03-3261-8281 <http://www.bunmeisha.co.jp>
- 城島印刷(株) 〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6  
TEL 092-531-7102 <https://www.kijima-p.co.jp>
- (株)桑川印刷 〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7  
TEL 03-3943-9811 <http://www.kumekawa.jp>
- 株式会社クリムゾングラフィックジャパン 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F  
TEL 03-3525-8001 <https://www.crimsonjapan.co.jp>
- 港北出版印刷(株) 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7  
TEL 03-5466-2201 <http://www.kohoku.co.jp>
- 三松堂(株) 〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階  
TEL 03-6823-5360 <https://www.sanshodo.co.jp>
- 三美印刷(株) 〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8  
TEL 03-3803-3131 <https://www.sanbi.co.jp>
- 三立工芸(株) 〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F  
TEL 03-3261-5171 <https://www.sanritsu-net.co.jp>
- 三和印刷(株) 〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1  
TEL 026-285-2300 <http://www.sanwaprinting.jp>
- 信濃印刷(株) 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11  
TEL 03-3237-3601 <http://www.shinano-insatsu.co.jp>
- (株)渋谷文泉閣 〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7  
TEL 026-244-7185 <http://www.bunsenkaku.co.jp>
- (株)真興社 〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2  
TEL 03-3462-1181 <https://www.shinkousha.co.jp>
- 新日本印刷(株) 〒162-0801 東京都新宿区山吹町342  
TEL 03-3269-3611 <https://www.sinnihon.net>
- (株)精興社 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9  
TEL 03-3293-3021 <https://www.seikousha-p.co.jp>
- 創栄図書印刷(株) 〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766  
TEL 075-255-2288 <https://www.soei-pb.co.jp>
- 大同印刷(株) 〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20  
TEL 0952-71-8550 <https://www.daidou-jp.com>
-

# 新自由主義の廃墟で — 真実の終わりと民主主義の未来

ウェンディ・ブラウン著 河野真太郎訳

四六判上製 272 頁 定価 3,740 円 (本体 3,400 円 + 税)

排外主義や権威主義、ウルトラナショナリズムにフェイクニュース……それらの根源はどこにあるのか。ハイエクなど初期新自由主義者たちの論考を辿りながら、世界に吹き荒れる政治言説の布置を問い直す、政治哲学者による批判の書。



# 動物倫理の最前線 — 批判的動物研究とは何か

井上太一 著

四六判上製 360 頁 定価 4,950 円 (本体 4,500 円 + 税)

いまや動物にとどまらず、あらゆる存在の解放をめざす包括的正義の理論へと至った批判的動物研究を始めて本格的に紹介。理論水準を大幅に引き上げるとともに、実践へと誘い、シンガー『動物の解放』以来の衝撃をもたらす力作。



# ガリツィアのユダヤ人 — ポーランド人とウクライナ人のはざま

野村真理著

四六判並製 272 頁 定価 3,300 円 (本体 3,000 円 + 税)

現在は西ウクライナと呼ばれる東ガリツィア。かつてそこでは、ウクライナ人が多数者でありながら、政治的、経済的支配権は少数者のポーランド人が握っていた。やがてこの地でウクライナ人の民族独立運動が立ち上がり、スターリンのソ連とヒトラーのドイツが衝突するなかで、ユダヤ人はいかなる運命をたどったのか。【新装版】



## ★人文書院 100 周年フェア開催中★

京都で生まれて 100 年。その意外な来歴と戦後の実存主義ブームを彩った個性派出版社の 100 年をふりかえる! 無料小冊子配付



### ☆ 下記書店で開催中

慶應義塾大学生協三田書籍部  
立命館大学生協存心館ふらっと  
早稲田大学生協早稲田店  
早稲田大学生協戸山店

人文書院

〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町 9 Twitter @jimbunshoin (税込)  
TEL075-603-1344 FAX075-603-1814 <http://www.jimbunshoin.co.jp/>

# 一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

## ●北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目  
北海道大学構内  
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

## ●弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地  
弘前大学附属図書館内  
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

## ●東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1  
東北大学構内  
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

## ●流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120  
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

## ●聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550  
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

## ●慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30  
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

## ●専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3  
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

## ●玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1  
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

## ●中央大学出版部

〒192-0393 八王子市市中野742-1  
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

## ●東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場4-5-29  
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

## ●東京電機大学出版局

〒120-8551 足立区千住旭町5番  
TEL 03-5284-5385 FAX 03-5284-5387

## ●法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-3  
法政大学九段校舎内  
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

## ●武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20  
武蔵野大学構内  
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

## ●武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7  
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

## ●明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1  
TEL 042-591-9979 FAX 042-591-9254

## ●早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12  
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

## ●関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1  
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

## ●名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町1  
名古屋大学構内  
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

## ●名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57  
名古屋外国語大学内  
TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

## ●京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69  
京都大学吉田南構内  
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

## ●大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7  
大阪大学ウエストフロント  
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

## ●関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35  
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

## ●関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155  
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

## ●九州大学出版会

〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34  
九州大学産学官連携イノベーションプラザ305  
TEL 092-833-9150 FAX 092-833-9160

## ●大阪経済法科大学出版部(休会)

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10  
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

〔発行所〕

一般社団法人 大学出版部協会  
ISSN 0913-3305  
振替 00170-8-389131

〒102-0073  
東京都千代田区九段北1丁目14番13号  
メゾン萬六403号室  
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092  
E-mail : mail@ajup-net.com  
URL : <https://www.ajup-net.com/>

〔表紙デザイン〕 奥定泰之

〔表紙写真〕

ミネルヴァの巢よ  
新たな時代に棹差し  
いざ飛び発たん!!

photo : urfin / shutterstock.com



\* 本誌のバックナンバーは、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードできます

大学出版130号 (2022年春)

2022年6月30日発行

頒価 100円 (千共)